

# 施設内老人虐待研究と 家庭内老人虐待研究の異同の検討

— 今後の施設内老人虐待研究のために —

大 村 壮

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

## 問題・目的

近年、児童虐待に関する話題が非常に多くなってきている。それに対して、老人虐待（杉井，1995）の問題はあまり論じられることがない。2005年2月にグループホームで、職員による虐待殺人が起こってしまったが、社会的な反響はそれほど大きくなかった（三好，2005a）。その理由について三好（2005a）は「この事件がほとんど語られることがない原因は根深いものです。ひとつは、世の中の人々が老人介護、特に痴呆の老人の介護は大変な仕事なんだから、こんな事件があったって問題にすべきではない、とどこかで考えていることだろうと思います（p.4）」と述べている。しかし老人虐待の問題に対する社会的関心がそれほど高くない、もしくは隠しておくべきタブーとされている可能性があるとはいえ、老人虐待は放置しておくことのできない重要な問題であることは確かである。

老人虐待は大きく、誰からの虐待なのかという分類、具体的な行為の分類がある。そのうち前者に関しては、施設内老人虐待と家庭内老人虐待に分けられる。これまで国内外ともに家庭内老人虐待の研究は非常に多く取り上げられている（例えば Hughes, 1997；加藤・近藤・樋口・久世，2004 など）。それに対して施設内老人虐待の研究は家庭内の虐待に比べると数が少ない。その理由として施設内老人虐待は家庭内老人虐待と性質が違い（Clough, 1996）、外から見えづらいことが挙げられている（Griffin & Aitken, 1999）。また施設内老人虐待は、その原因や要因のみならず、その実態すら未だにはっきりとは明らかになっていないとされている（Goodridge, Johnston & Thomson, 1996；Pillemer & Moore, 1989, 1990）。

そこで本稿では、老人虐待のうち、特に老人福祉施設内での虐待に焦点を当て、これまでの研究から明らかにされていることを検討し、施設内老人虐待と家庭内老人虐待の相違がどこにあるのかについて、特に施設内ケアと家庭内ケアの違いに焦点を当てて考察する。そこから、今後の日本における老人虐待研究の課題を導き出すことが目的である。

施設内老人虐待の件数

最初に施設内老人虐待の大規模な実証的な調査を行ったのは Pillmer & Moore (1989) であろう (Richardson, Kitchen & Livingston, 2002)。確かにそれ以前にも観察やフィールドワークによる調査などは存在した (例えば Gubrium, 1975 ; Stannard, 1973)。しかし体系的な調査を実施したのは Pillmer ら (1989) が初めてである。Pillmer ら (1989) による調査から、過去 1 年間に 1 度でも職員による身体的な虐待場面を目撃した職員は 36% いた (Table 1)。そして心理的な虐待場面の目撃は 81% となっている (Table 2)。

Table 1 過去 1 年間に職員によって目撃された身体的虐待 (Pillmer & Moore, 1989)

虐待のタイプ	1度もない	1度だけある	2~10回ある	10回以上ある
過度の抑制の行使	79%	6%	9%	6%
押す、掴む、突き飛ばす、つねる	83%	7%	9%	1%
平手打ち、叩く	88%	6%	6%	—
何かを投げつける	97%	2%	1%	—
拳で殴る	98%	1%	1%	—
物で叩く、叩こうとする	98%	1%	1%	—

Table 2 過去 1 年間に職員によって目撃された心理的虐待 (Pillmer & Moore, 1989)

虐待のタイプ	1度もない	1度だけある	2~10回ある	10回以上ある
怒って利用者に大声で叫ぶ	30%	11%	44%	15%
侮辱するまたは罵る	50%	9%	30%	11%
不適切に利用者を孤立させる	77%	7%	12%	4%
叩くまたは投げつけると脅す	85%	5%	9%	1%
食事を与えなかったり、特別扱いする	87%	2%	8%	3%

その一方で、これらの行為を 1 度でも実際に行ったことがある職員は少なく、身体的虐待を行ったことがあるという職員は 10% (Table 3)、心理的虐待を行ったことがあるという職員は 40% である (Table 4)。

Table 3 過去 1 年間に職員によってなされた身体的虐待 (Pillmer & Moore, 1989)

虐待のタイプ	1度もない	1度だけある	2~10回ある	10回以上ある
過度の抑制の行使	94%	3%	2%	1%
押す、掴む、突き飛ばす、つねる	97%	2%	1%	—
平手打ち、叩く	97%	2%	1%	—
何かを投げつける	98%	1%	1%	—
拳で殴る	99%	—	1%	—
物で叩く、叩こうとする	100%	—	—	—

Table 4 過去1年間に職員によってなされた心理的虐待 (Pillmer &amp; Moore, 1989)

虐待のタイプ	1度もない	1度だけある	2~10回ある	10回以上ある
怒って利用者に大声で叫ぶ	67%	15%	17%	1%
侮辱するまたは罵る	90%	4%	5%	1%
不適切に利用者を孤立させる	96%	1%	2%	1%
叩くまたは投げつけると脅す	96%	2%	2%	—
食事を与えなかったり、特別扱いする	98%	1%	1%	—

また、Goodridge, Johnston & Thomson (1996) によると、身体的虐待は、月に平均 9.3 回、言葉による虐待は月に平均 11.3 回起こっていることが明らかにされている。そして Saveman ら (1999) によると、55 人、11% の職員が何らかの老人虐待を見知っており、そのうち 11 人、2% の職員が暴力をしたことがあると回答している。ドイツのナーシングホーム職員を対象とした Goergen (2004) は、以下のような結果を報告している (Table 5)。それによると、1989 年の Pillmer らの調査に比べて数が多いことがわかる。

Table 5 職員による虐待行為の行使と目撃 (Goergen, 2004)

入居者に対する行為	実際にやった者	目撃した者
身体的虐待	16 名 (19.8%)	17 名 (21.0%)
心理的虐待/暴言	30 名 (37.0%)	46 名 (56.8%)
抑制帯等の不適切な使用	12 名 (14.8%)	9 名 (11.1%)
薬の不適切な使用	10 名 (12.3%)	17 名 (21.0%)
放置的ケア	22 名 (27.2%)	32 名 (39.5%)

#### 施設内老人虐待の要因の検討：家庭内老人虐待との対比

施設内老人虐待の要因として検討されてきたのは、職種、年齢、職務満足、仕事量の満足感、賃金、バーンアウト傾向、ストレス、性格傾向、教育レベル、人種といった職員の要因 (Goergen, 2004 ; Pillmer & Bachman-Prehn, 1991 ; Pillmer & Moore, 1989 ; Saveman, 1999)、そして老人からの暴力や葛藤といった職員と老人との間に介在する要因 (Goodridge, et al, 1996 ; Mercer, Heacock & Beck, 1993 ; Pillmer & Bachman-Prehn, 1991 ; Pillmer & Moore, 1990) である。

これらの要因のうち、虐待発生を促進する要因として、職員の要因では、職務満足が低い、バーンアウト傾向が高い、ストレスが高い、教育レベルが低い、資格レベルが低いといったものが挙げられている。そして職員と老人の間に介在する要因である、老人からの暴力が重要な要因として挙げられており、その他に老人と職員との葛藤も虐待を促進する要因とされている。その一方、家庭内老人虐待では、検討されていた老人の痴呆傾向の有無や ADL レベルといった老人側の要因 (National Research Council, 2003 ; 田中, 1998, 2000) は、施設内老人虐待の研究では検討

されてきていない。そして、これは日本特有の問題であるかもしれないのだが、海外の家庭内老人虐待の研究ではほとんど顧みられていないにもかかわらず、日本の家庭内老人虐待の研究では指摘されている要因として、老人から、あるいは夫からの感謝がない、ねぎらいの言葉がない、老人が言うことを聞かないといった、人間関係の不和（田中，2000；臼井，2000）がある。またこの要因についても施設内老人虐待の研究では検討されてきていない。ちなみに「葛藤」とは、「老人がすぐに服を着てくれない」「老人が施設の外に行きたがる」といった、職員としては老人の希望を受け入れたいが、受け入れれば他の職務遂行に支障を来たしてしまうような葛藤の状況を指している。それに対して「人間関係の不和」とは、「老人や夫が感謝してくれない」「老人が言うことを聞いてくれない」といった、ケアする家族が老人に求めていることを老人がやってくれない状況のことを指している。

ここで問題となるのは、施設内老人虐待と家庭内老人虐待の構造を平行なものとして捉えるのか、それとも異なる構造を有しているものとして捉えるのかである。もし同じ構造であると捉えるならば、家庭内老人虐待研究の知見はそのまま施設内老人虐待に応用できる。しかし、異なる構造であるならば、そのまま知見を応用することはできない。応用する際には何らかの加工が必要となる。そしてこのことを考えるには、家族介護と施設介護というもう1つ上位の問題から考える必要がある。先に述べたように、多くの研究は家庭内老人虐待と施設内老人虐待の性質は異なることを指摘している（Clough, 1996；Griffin & Aitken, 1999）。

それではどうして家庭内老人虐待では、被害者である老人の要因が検討されているのに対して、施設内老人虐待では検討されていないのだろうか。そして、人間関係の不和についてはどうなのだろうか。

### 施設内ケアと家庭内ケアの相違：ケア労働の根拠

これまでの施設内老人虐待研究では、家庭内老人虐待と施設内老人虐待は質が違うということが再三主張されてきた（Clough, 1996；Griffin & Aitken, 1999）。その相違の根拠として、Griffin & Aitken（1999）は、利用者と職員についての施設内の老人虐待のジェンダー化された特殊性、すべにある暴力の文化、主体性と依存性の問題、そして介入の問題があるとしている。そして Clough（1996）は、職員は親族ではない利用者に対して、親しみのこもった身体的なケアを提供することが求められているということ、利用者が生活する場である施設は、職員にとっては労働の場であるということ、社会における老人の位置づけの問題、そもそも老人は、助けがなければ生活できない存在であり、子どもや青年よりも価値がないとされているということ、以上を挙げている。

また、Lachs & Pillmer（2004）は、施設内老人虐待についての科学的な実証研究はほとんどなく、施設内老人虐待と家庭内老人虐待は、その構造も原因もそして結果も異なっており、分けて考えるほうが良いことを指摘している。

施設内ケアと家庭内ケアの大きな違いはいろいろ考えられるが、その1つとして虐待の加害者にもなりうるケア労働者が挙げられる。施設であろうが、家庭であろうが、どちらもケア労働であるが、施設でケアを提供する主体は職員であり、その労働に対しては少ないという指摘はある

ものの賃金が支払われている。つまり、他の賃金労働と同様、労働を提供しその対価として賃金を得るという関係になっている。例えば須賀（2003）によると、ケア労働をやっている理由として、「介護の仕事に関心があったから」に続いて、「収入を得たいから」が2番目に多くなっているように、施設職員にとってのケア提供は、賃金労働なのである。それに対して家庭内でケアを提供する主体は、子や子の嫁などであり、家庭内のケア労働は、無償労働である（Himmelweit, 1995/1996 春日, 1997；上野, 2005）。そして家庭内でのケア労働の根拠は、愛情であるとされたり、義務感であるとされたりする（春日, 1997；山田, 1994）。そのため、家庭内でケアを受ける老人は、愛想良くしたり、感謝をしたり、ケア労働者に注意されたことを素直に受け入れたりすることが求められる（臼井, 2000）。このような愛情や義務感といった移ろいやすい心的な側面が、家庭内ケア労働の根拠となっているため、家庭内で、老人がケアをずっとやってもらうためには、ケア労働者に対してどのような態度をとるのか、自分でできる範囲はどこまでなのかなど、老人の側の要因が重要となる。

このような理由から、施設内老人虐待では検討されていなかった老人の要因が、家庭内老人虐待のリスク要因として検討されてきたのではないかと考えられる。そして人間関係の不和についても、そもそも施設内のケア労働は、提供したケアに対しては賃金という対価を受け取るため、老人から感謝がないから虐待をするということはない、と考えられているのかもしれない。このような家庭内ケアと施設内ケアの相違が、虐待のリスク要因の相違にも繋がっているのではないかと考えられる。

### 施設職員の労働とは

以上のように、ケア労働の根拠という点から、施設内ケアと家庭内ケアの相違について検討し、先行研究で扱われてきた虐待のリスク要因の相違について検討してきた。確かに労働の形式として、施設内ケアと家庭内ケアは明らかに違う。しかし、実際に働いている施設職員たちにとって、この形式的な相違がどれだけ意識され、認識されているのかはまた別の問題であろう。労働を提供し、そして賃金を得るという労働の形式に対する認識について、ある療養型病床群病院（ケアを重視した病院）の主任看護師に話を聞いた。

「〇〇さんに『あなたは誰から給料をもらっていますか？』と聞いたら、『事務長』と答えた。私が怪訝そうな顔でいると、『なに、患者さんって答えてほしかった？』と笑っていた（フィールドノート, 2003年8月26日）。

このように、フィールドワーク中の一事例でしかないが、労働の形式について、労働の提供先と賃金の受け渡し元についての認識がズレていることがわかる。ここから次のことが推察される。

通常の労働の形式であれば、労働の提供先と賃金の受け渡し元は同一である。しかし、この看護師の場合、その提供先と受け渡し元がズレている。当人の視点に立つと、老人に対してケアを提供するが、その老人からは何も受け取っていないことになる。つまり、先の家庭内ケアについて検討したときと同様、職員は、老人から何も受け取っておらず、どうしてその老人のケアをす

るのかについては、先に労働の形式について検討したときとは違い、その労働の根拠が曖昧である可能性がある。例えば介護の現場では、老人について次のような「可愛い」という言葉が聞かれることが多い。

「××号室の A さん（患者）が 16:00 すぎに車イスに乗っていたところ、B さん、C さん、D さん（3 人とも介護職員）が来た。最初のうちは A さんがもっているネコのぬいぐるみについてみんなで話し、『可愛いねえ〜』とっていたが、B さんが『A さん可愛いねえ〜。この髪型も可愛い』と言って髪に毛に触っていた。A さんはニコニコしていた（フィールドノート、2003 年 7 月 8 日）」

この他にも「可愛いおじいちゃん目指してね」という職員の言葉（フィールドノート、2000 年 11 月 23 日）などが聞かれる。こちらの「可愛い」という言葉は先に述べた家庭内老人虐待の要因について検討した臼井（2000）が指摘している要因と類似なものではないだろうか。つまり、老人はケアを受け続けるためには、自分を魅力的な人間として自己呈示することが求められているということである（大村、2003）。そうしなければケア労働者から受け入れられないかもしれないのである（鷺田、2003）。

以上のことから、施設職員の労働の形式は、家庭内でのケア提供者の労働の客観的な形式とは明らかに異なる一方、ケア労働者の視点に立つと、両者の間にはそれほどの違いは見受けられない。つまり、家庭内老人虐待の要因とされているものは、同時に施設内老人虐待の要因としても検討しうるのではないかと考えられる。

そして施設職員のもう 1 つ大きな問題として、彼らの劣悪な労働条件がある（Griffin & Aitken, 1999 ; Mercer, Heacock & Beck, 1993 ; 渋谷, 2003）。特に賃金については安すぎるという指摘はとても多い（例えば Griffin & Aitken, 1999 ; 渋谷, 2003）。賃金は低すぎるという指摘がある。そしてその低賃金が虐待を誘発する可能性について Griffin & Aitken (1999) は、介護職の低賃金が、金銭以外の報酬、例えば他人を支配する喜びなどを採らせることになると述べている。このように、そもそも賃金が安すぎるために、賃金が労働の根拠としての機能を果たしていない可能性がある。つまり、賃金が安すぎるため、職員は自分の介護労働とそれに対する賃金の間で認知的不協和（Festinger, 1957/1965 ; Festinger & Carlsmith, 1959）を起し、他人を支配する喜びを求めるようになるとも考えられるからである。

#### 今後の施設内老人虐待研究の展望

ここまで、施設内老人虐待についてその要因について検討すると同時に、家庭内老人虐待との異同について検討してきた。先行研究からは、施設内の老人虐待と家庭内の老人虐待は異なると指摘されている。しかし、施設と家庭のケア労働の客観的な形式において考えると、両者の間には相違があるものの、ケア労働者の視点に立って見えてくるケア労働を考えると、両者の間にはそれほど違いがあるとは考えられず、家庭内老人虐待研究で指摘されている虐待のリスク要因も、十分に施設内老人虐待のリスク要因足りえると考えられる。特に家庭内老人虐待研究において検

討されているにもかかわらず、施設内老人虐待研究では検討されることのなかった、人間関係の不和（田中，2000；白井，2000）といった要因は、今後の施設内老人虐待の研究においても検討する必要のある要因の1つなのではないだろうか。

しかしその際、あくまで家族とは違い、職員は賃金を老人から受け取っていること（大村，2004）を前提に考えなければならないだろう。なぜならば、家族が賃金を受け取っていないアマチュアであるのに対して、職員は賃金をもらっているプロであるからであり、故にプロである職員は、ときに文句も苦情も言わぬ「考える杖（三好，2005b）」にならなければならない、それを全うすることが必要だからである。ここが家族によるケアとの大きな相違であろう。そして、老人が施設での生活の主演となり、自らは黒子になるような関わりが必要だからである。ケアを受ける者は受けたくて受けているのではない人が少なからず存在する（最首，2005）。そのような中でプロの職員は、個々の老人の自己決定（立岩，2000b）を支え、個々の老人に合わせた個別ケアを提供していくことが求められている。もちろんこれらのことはプロの職員だけの問題ではないだろう。老人の自己決定を支え、個別ケアを行っていくのは、ケアに携わるすべての人々の問題なのだろう。しかしながら、介護福祉士などの専門性が問われている（立岩，2000a）今だからこそ、職員が黒子のような役割を果たしているのかどうかを念頭に置き、施設内の老人虐待についても検討していくことが必要なのではないだろうか。

## 文 献

- Clough, R. 1996 The abuse of residents. In R.Clough (Ed.), *The abuse of care in residential institutions* (pp.3-9). London: Whiting & Birch Ltd.
- Festinger, L. 1965 認知的不協和の理論（末永俊郎，監訳）誠信書房（Festinger, L. 1957 *A theory of cognitive dissonance*. U.S.A.: Row, Peterson and Company）
- Festinger, L., & Carlsmith, J.M. 1959 Cognitive consequences of forced compliance. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 58, 203-210.
- Goergen, T. 2004 A multi-method study on elder abuse and neglect in nursing homes. *The Journal of Adult Protection*, 6(3), 15-25.
- Goodridge, D.M., Johnston, P., & Thomson, M. 1996 Conflict and aggression as stressors in the work environment of nursing assistants: implications for institutional elder abuse. *Journal of Elder Abuse & Neglect*, 8(1), 49-67.
- Griffin, G., & Aitken, L. 1999 Visibility blues: gender issues in elder abuse in institutional settings. *Journal of Elder Abuse & Neglect*, 10(1/2), 29-42.
- Gubrium, J.F. 1975 *Living and dying at Murray Manor*. New York: St. Martin's Press.
- Himmelweit, S. 1997 “無償労働”の発見：“労働”概念の拡張の社会的諸結果 日米女性ジャーナル, 20, 116-136（久場嬉子，訳）Himmelweit, S. 1996 Feminist consequences of the expansion of “work”. *Feminist Economics*, 1(2).

- Hughes, M. 1997 "That triggers me right off": factors influencing abuse and violence in older people's care-giving relationships. *Australian Journal on Aging*, 16(2), 53-60.
- 春日キスヨ 1997 介護一愛の労働 井上俊・上野千鶴子他(編), 岩波講座現代社会学: 13 成熟と老いの社会学 (pp.179-196) 岩波書店
- 加藤悦子・近藤克則・樋口京子・久世淳子 2004 虐待が疑われた高齢者の状況改善に関連する要因: 介護保険制度導入前後の変化 老年社会科学, 25, 482-493.
- Lachs, M.S., & Pillmer, K. 2004 Elder abuse. *Lancet*, 364, 1263-1272.
- Mecer, S.O., Heacock, P., & Beck, C. 1993 Nurse's aides in nursing homes: perceptions of training, work loads, racism, and abuse issues. *Journal of Gerontological Social Work*, 21(1/2), 95-112.
- 三好春樹 2005a はじめに: このセミナーを開いた理由 下村恵美子・高口光子・三好春樹(編), あれは自分ではなかったか: グループホーム虐待致死事件を考える (pp.3-5) ブリコラージュ
- 三好春樹 2005b 介護の町内化とエロス化を 川本隆史(編), ケア社会倫理学: 医療・看護・介護・教育をつなぐ (pp.203-223) 有斐閣
- National Research Council 2003 *Elder mistreatment: abuse, neglect, and exploitation in an aging America*. The National Academics Press.
- 大村 壮 2003 老人の心: 介護を必要とする老人から見る老人の心 都筑学(編著), やさしい心理学: 心の不思議を考える(pp.126-143) ナカニシヤ出版
- 大村 壮 2005 高齢者福祉施設におけるお金の動きの可視化についての一考察: ダイレクト・ペイメントを参考に 発達心理学の探求, 7, 167-170.
- Pillemer, K., & Bachman-Prehn, R. 1991 Helping and hurting: predictors of maltreatment of patients in nursing homes. *Research on Aging*, 13(1), 74-95.
- Pillemer, K., & Moore, D.W. 1989 Abuse of patients in nursing homes: findings from a survey of staff. *The Gerontologist*, 28, 51-57.
- Pillemer, K., & Moore, D.W. 1990 Highlights from a study of abuse of patients in nursing homes. *Journal of Elder Abuse & Neglect*, 2(1/2), 5-29.
- Richardson, B., Kitchen, G., & Livingston, G. 2002 The effect of education on knowledge and management of elder abuse: a randomized controlled trial. *Age and Ageing*, 31, 335-341.
- 最首 悟 2005 ケアの淵源 川本隆史(編), ケア社会倫理学: 医療・看護・介護・教育をつなぐ (pp.225-249) 有斐閣
- Saveman, B-I., Åström, S., Bucht, G., & Norberg, A. 1999 Elder abuse in residential settings in Sweden. *Journal of Elder Abuse & Neglect*, 10(1/2), 43-60.
- 渋谷 望 2003 魂の労働: ネオリベラリズムの権力論 青土社
- Stannard, C.I. 1973 Old folks and dirty work: the social conditions for patient abuse in a nursing home. *Social Problems*, 20(3), 329-342.
- 須賀和彦 2003 介護保険とホームヘルプサービス 東京国際大学論叢(人間社会学部編), 9, 109-122.



- 杉井潤子 1995 老人虐待をめぐる：老人の「依存」と高齢者の「自立」井上眞理子・大村英昭(編),  
ファミリズムの再発見 (pp.131-170) 世界思想社
- 田中荘司 1998 高齢者虐待の現状とその対応 人権のひろば, 1(2), 11-14.
- 田中荘司 2000 わが国の高齢者虐待の現状. 社会学論叢(日本大学社会学会), 139, 91-115.
- 立岩真也 2000a 余剰と空白：世話することを巡る言説について 副田義也・樽川典子(編), 流動  
する社会と家族Ⅱ：現代家族と家族政策 (pp.63-85) ミネルヴァ書房
- 立岩真也 2000b 弱くある自由へ 青土社
- 上野千鶴子 2005 老いる準備：介護することされること. 学陽書房
- 白井キミカ 2000 虐待者へのインタビュー調査からみた在宅高齢者虐待の要因 月刊福祉,  
83(14), 20-23.
- 鷺田清一 2003 老いの空白 弘文堂
- 山田昌弘 1994 近代家族のゆくえ：家族と愛情というパラドックス 新曜社